

追悼

2023. 12. 12

私が文章を書く上で、強く大きな影響を受けてきた伊集院静さんが、11月に、この世を去った。突然のことだった。2020年1月に、くも膜下出血で緊急搬送された。手術の後、3月には、後遺症はなく仕事の再開を表明している。あのときは、それまでメディアに出ることがなかった妻の篠ひろ子さんが、「必ず復帰してもらい、また作品を書いてもらいます」と力を込めてコメントしていたのが印象的だった。奥さんの願いが通じたのだろう。

10月から肝内胆管がんで闘病していたことを知らなかった。テレビで訃報を知った。しばらくぼおっとしていた。そこから、全11冊を読んできている「大人の流儀」シリーズや何冊か読んだ小説のことが思い浮かんだ。中でも、一番影響を受けたのが『それでも前へ進む』である。JR東日本の車内誌「トランヴェール」の歴代人気ナンバーワンの連載「車窓に揺れる記憶」が単行本になったものである。トランヴェールのエッセーに読み浸り、これだけの文章であれば、きっと書籍化されているはずだ。そう信じ、書店に向かい、ウロウロと探し回り、『それでも前へ進む』を見つけたときの感動は忘れられない。「あった。やっぱりあった」

妻の篠ひろ子さんは、「強がりを持って誰にも会わずに逝ってしまった主人のわがままをどうかお許しください。最期まで自分の生き方を貫き通した人生でした」とコメントを発表している。仙台のご自宅には行ったことがある。もう一つ、行ってみたいところがある。伊集院さんが東京の定宿としていた山の上ホテルである。そのうち、行ってみようと思う。

伊集院さんの文章が、人の心を打つのは、胸に響くのは、きっと、胸の内に哀しみを温めているからであろう。10代だった弟さんの死や前妻である夏目雅子さんの死が、その根底にあるのだと思う。だから、伊集院さんの文章はやさしくもある。

伊集院さんの生き方は、ぶれない、そして逃げない。そこに憧れる人も多い。かつて、「毎日のことに一生懸命だったから、休まない、仕事し続ける、遊び続ける」と話していた。すべてに全力投球の人生だった。また、死生観に関しては、「生きるのは束の間、死ぬのはしばしのいとま」と言っていた。

実は、11月24日の訃報に接した後、1週間ほど、この校長室だよりを書かなかった。こんなことは、今まではなかった。喪に服していたわけではない。気分的なものだろう。12月が近づき、再びキーボードと向き合うことにした。そして、再び執筆活動が軌道に乗ったところで、この原稿である。タイトルを「追悼」とした。

我が家には、ちょっとした伊集院静コーナーがある。これから、このコーナーの蔵書が増えていかないのかと思うと、やはりさびしい。残念である。だが、書籍は残る。これからも時折、読み返して伊集院静イズムを味わいたい。